慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | メンガーの「Bedürfnisの理論」について |
| Sub Title | Über Mengers Lehre von den Bedü r fnissen |
| Author | 持丸, 悦朗 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1958 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.5 (1958. 5) ,p.419(47)- 433(61) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19580501-0047 |
| Abstract | |
| Notes | 論説 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19580501-0047 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

（注8）規模別賃金格差の原因を、企業の生産力の差に求める見解が多い。同一部門内における規模別賃金格差が、企業別労働生産力の差→利潤率の差に依存することは、当然であるが、異部門間では、生産力の差という概念は成立しないのであって、それ故、本節で述べたような資本家諸階層間の競争対立関係や、労働者階級の組織状態によるものとして理解されねばならない。

（注9）先進資本主義国では、日本におけるような規模別賃金格差は現在殆んど問題になっていないようである。しかし、貨幣賃金だけではなくあらゆる労働条件を考慮すれば、ある程度の差があり、さらに雇用の安定性、及び将来における昇給・昇進の可能性の問題迄考えれば、相当の開きが出てくるであろう。

× × × ×

独占段階における階級諸対立は、あくまでも資本蓄積の発展の中で位置づけられねばならないが、本稿では利潤率の階層化と関連づけるかぎりでとりあげられた。それは、本稿が、現段階における資本蓄積の研究の緒論であって、資本蓄積の発展の仕方を規定する重要な要因としての利潤率の階層化に主題がおかれたからである。さらに、現段階における恐慌の形態変化の問題や、生産力の一面における停滞化と他面における急激な発展というような複雑な発展の仕方を研究していく中で、階級諸関係の分析も深めてゆかねばならない。



# メンガーの「Bedürfnis の理論」について

持丸悦朗

カール・メンガーの経済学はしばしばその目的論的性格が強調されている。例えば杉村広蔵教授は、メンガーが「経済性」の概念に「その根元的なる価値原理をあらわさんとつとめた」[注1]のであり、また彼の「精密的方法」は「『当為』の対象性を論じたもの」[注2]であり「その理論の根柢にはつねに実践哲学的要請がはたらいていた」[注3]とされている。また山田雄三教授も『国民経済学原理』第二版[注4]において、「経済性」の概念が導入されていることを重要視され、「真なる（wahr）価値」のみが「経済性」に結びつくものであるところから「メンガーが出発点とした個人的経済判断が完全に合理的な経済判断であった」[注5]とされ、また『国民経済学原理』初版[注6]における「諸財の因果関連」という表現が排除され「人間の目的意識における諸財の関連」と改められているところから「メンガー理論を目的論的性格と呼ぶことが不都合ではない」[注7]と主張されている。

両氏のいわれるようにメンガーの経済学には「経済性」の概念を中心としてその目的論的性格を示しているように思われる多くの叙述がある。

だが他方において山田教授も認めておられるように[注8]、メンガーは「あらゆる物は因果の法則に支配されている」と説き、また、「自然科学的方法」を強調している。

我々はこのメンガー経済学における二つの矛盾した性格をどのように考えるべきであろうか。この問題に答えるためには我々はメンガーの Bedürfnis の概念を検討しなければならない。なぜならば、Bedürfnis の概念は「経済性」を支える根源的な概念だからである。

メンガーによれば価値には「真実の（wahr）価値」と「虚偽の（eingebildet）価値」とがあり前者のみが経済性に結びつくものである。それでは「真実の」また「虚偽の」価値とはいかなるものであるか。それはある財に真に Bedürfnis の満足が依存しているか否かによって、換言すれば「真実の財」に与えられた価値であるか、また「虚偽の財」に与えられた価値であるかによって決定されるの

である。更に「真実の財」と「虚偽の財」とは、人間の Bedürfnis が正しく認識されているか否か、またこれに対する財の有用性、支配可能性が正しく認識されているか否かによって決定される。それゆえに Bedürfnis の正しい認識は「真実の財」の前提であり、「真実の価値」の前提であり、「経済性」の前提でもある。

したがってメンガーの Bedürfnis がどのようなものであるか、また Bedürfnis が彼の体系においてどのような地位を占めるかは我々の問題を解決するのにきわめて重要であると思われる。

(注1) 杉村広蔵著『経済哲学の基本問題』、昭和十年、岩波書店、九四頁。

(注2) 同書、一三三頁。

(注3) 同書、一三三—四頁。

(注4) Carl Menger: Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. 2 Aufl. aus dem Nachlass, hrsg. von Karl Menger. Wien und Leipzig. 1923. 以下『原理』第二版または単に『第二版』とよぶ。

(注5) 山田雄三『経済学説全集』第9巻『近代経済学の生成』、「第三章 カール・メンガー」一一二頁。

(注6) Carl Menger: Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. Erster, allgemeiner Theil. Wien. 1871. 以下『原理』初版または単に『初版』とよぶ。



(注7) 山田雄三、前掲書、一二三頁。

(注8) 「またメンガーでは『自然科学的方法』という観点が強調されているかと思うと、自然科学的因果関連の代りに『目的意識の関連』ということが力説されている。」前掲書、一〇四頁、「メンガー自身が経験科学的又は自然科学的方法にしたがって彼の理論を構成しようとしたことは看取されるが、しかも内容的には目的論的性格と結びついているところに問題がある。」前掲書、一二三頁。

## 一

メンガーは『原理』初版においては Bedürfnis がどのようなものであるかについて殆んどのべていない。ただ第二章の冒頭に数行の簡単な説明（後出）があるのみである。これに反して第二版では、その始めに独立の「Bedürfnis の理論」と題する章が設けられている。

メンガーはこの章を次のような前書きで始めている。「あらゆる経済理論の研究の出発点はものを必要とする（bedürftig）人間の本性である。Bedürfnis なしには経済も、国民経済も、それについての科学もない。Bedürfnis は最後の基礎であり、その満足が我々にとってもつ重要性は最後の尺度であり、その満足を確保することは、すべての人間経済の最終的目標である。Bedürfnis の理論（Bedürfnis の本質の認識と理解）は経済学にとって根本的に重要であり、同時に自然科学、特に生物学から精神科学一般、特に経済学に導く橋である。」[注1] 我々はここで先ず二つの疑問を生ずる。それは第一になぜ Bedürfnis が経済学の最後の基礎であるのか、第二に Bedürfnis の理論はなぜ自然科学と精神科学、特に生物学と経済学を結ぶ橋であるのかということである。この間に答えるために、我々は先ずメンガーの Bedürfnis の理論そのものをみてゆくことにしよう。

メンガーは Bedürfnis を衝動（Trieb）、物欲（Begierde）との関連で説明している。彼によれば「他のすべての有機体と同様に」[注2]人間の生命は一定の条件に依存しているのであり、もしその条件がなければ死滅するか衰退するかのどちらかである。人間の生存条件に障害が起るならば、その障害の一部は無意識的な反射運動によって克服される。だがその一部は神経の刺激によって神経中枢に達し、種々の感覚、例えば不快、疲労等を惹起して我々の意識に達する。そして我々にそれを排除しようという欲求（Drang）をおこさせる。この欲求を衝動とよぶ。衝動はさしあたり物とは無関係である。だがある物が感覚、試験、習慣などによって、衝動をしづめる手段として役立つことが我々に認識されると、物欲、即ち衝動をしづめるのに役立つ物を獲得し、それを作用せしめようとする欲求が生じてくる。だが「我々が衝動および物欲とよんだ生活現象は単に人間性の不充分な表現であり、かくてまたその生命の維持とその福祉をめざす人間の努力のためには不十分な基礎でもある」[注3]。比較的高等な動物の場合ですら、その生活や快楽の維持の必要条件の予知や衝動の矛盾、その重要性の顧慮、また間接的必要条件が直接的なものを抑制することを我々は知っている。「人間経済は複雑な心理的—生理的組織とより高度の人間の精神的素質に応じて、人間的 Bedürfnis——〈全体的な人間性の維持と調和的発展の必要条件——にのみそれに対応する基礎を発見することが可能である。」[注4]

ここにメンガーの Bedürfnis の概念がのべられているわけであるが、これを「欲望 [Bedürfnis]」とは単に心理的感覚の如きにとどまるのではない。それはメンガーによれば『人間の本性の維持と調和的発展とを全体的に要求する』という意味で理性的なものとして説明されている。欲望（Bedürfnis）は衝動や物欲（Begierde）と区別して理性的なものである」[注5]とするのは危険である。なぜならばこの解釈は我々を、メンガーの経済学が目的論的性格、あるいは倫理的性格を有するものとする見解に導くからである。Bedürfnis が衝動や物欲とは異なったものであるということは勿論誤まりではない。問題はメンガーがこの章において、Bedürfnis が衝動、物欲と質的に区別される「理性的」なものと主張しているのか、それとも Bedürfnis は衝動、物欲という生活現象の発展として把握しようとしているかである。もし山田雄三教授の如く前者と考えるならば、「Bedürfnis の理論が自然科学と精神科学とを結ぶ橋である」ということはどのように考えたらよいのであろうか。

初版においては第二版の「Bedürfnis の理論」に相当すると思

われる文章は次の章句があるのみである。「Bedürfnis は我々の衝動に由来し、衝動は我々の本性に根ざしている。Bedürfnis の不満足は我々の本性の破壊を、その不十分な満足はこの本性の萎縮をもたらすものである。Bedürfnis を満足するということは、生き且つ栄えることを意味している。それゆえ我々の Bedürfnis 満足に対する配慮は我々の生命、我々の福祉に対する配慮と同意義である。この配慮は、あらゆる人間の努力のうち最も重要なものである。なぜならそれは残余一切の努力の前提であり基礎であるからである。」(注7)

ここではメンガーは、第二版でのように Bedürfnis と衝動との差異についてなにも述べていない。ただ Bedürfnis が衝動に由来する（entspringen）ものであり、また衝動は人間の本性に根ざす（wurzeln）ものであることを明言している。メンガーにとって Bedürfnis は人間の本性に基くもの、いわば本能的なものであったのである。

この考え方は第二版においても決して修正されていないばかりか、むしろ強化されているのである。

前述のようにメンガーは第二版では衝動、物欲と Bedürfnis との区別をしているのであるが、同時に「人間的 Bedürfnis は決して恣意の産物ではなく、我々の本性と、我々がおかれている事情によって与えられている。個々の Bedürfnis は慣習によって修正されたり抑圧されたりさえもされうるし、多くの場合に慣習によって惹起されうる。だが我々の Bedürfnis はそれがどこから出て来るにせよ我々の恣意とは、さしあたり、直接的には無関係な、我々の本性の要求である」(注7)と述べている。しかも Bedürfnis はそれが意識されると否とにかかわらず存在するのである。「人間的 Bedürfnis は発明の産物ではない。それは発見さるべきであり、したがって我々の認識努力の対象となるのである。」(注8) それゆえに、認識能力のない子供や、無能力者さえも Bedürfnis を有することになる。(注9)

かくて我々はメンガーの Bedürfnis が人間の本性と、そのおかれている環境によって必然的に決定されるものであることを知ることができる。Bedürfnis は欲望でもなければ理性的な欲望でもない。(注10) それは人間が生存し、発展してゆくための必要条件の表現である。それは人間の意志とは無関係に、人間の存在そのものによって決定されるものなのである。あるいは次のように言うことがより正確であるかもしれない。即ち Bedürfnis の認識は衝動とは異なってきわめて高度の意識現象である。だがそれがいかに高度のものであろうとも、結局は人間本能の所産であり、客観的に決定されているものであると。

メンガーはこの考えを更に第一章第二節で人間と他の動物とを対比することで説明している。「すべての有機体を観察すると、有機体の要求という意味での必要は、あらゆる生活過程の、特に新陳代謝の随伴現象として、特有の性質であり、その正常な発展である。この意味で有機体の Bedürfnis について述べることができる。」(注11) そして人間の Bedürfnis がかかる意味での動物の Bedürfnis に比していかに高度のものであろうとも、そこには本質的な区別は何ら存在しないのである。「他の有機体と人間との間には生理学的性質（肉体的組織）に関して本質的な相違がないばかりではなく、心理的関係においても高度に組織された動物は我々と同様に心理的生活（表象、感覚および志向、特に物欲）を、或る程度まで類似した判断さえももつのである。したがって動物の場合にはみられない意識現象も一層高度の発展、または複雑さとして理解さるべきであり、肉体的、生理的現象の領域における漸次的に異なった原因が実際しばしば本質的に異なった結果を惹起すると理解されるべきであろう。」(注12) 有機体の Bedürfnis から人間的 Bedürfnis を説明することは第二版において始めて行われていることである。この有機体の存在に伴う新陳代謝から人間的 Bedürfnis が説明されることがメンガーの Bedürfnis の理論の目的であったのである。

Bedürfnis は人間が人間という有機体であるがゆえに必然的に生じてくる人間行動の基礎なのであり、かくて経済学の最終的な基礎たりうるのである。また Bedürfnis の理論は人間行動の基礎である Bedürfnis を生理学的、生物学的に説明することによって精神科学と自然科学とを結ぶ橋となるのである。

だが我々には新たな疑問が起ってくる。それは、なぜメンガーが人間の本能に、生物学的な基礎に、人間の経済的行動の源泉を求めようとしたのであるか。換言すればメンガーはなぜ自然科学と精神科学とを結ぶ橋を、生物学と経済学とを結ぶ橋を必要としたのであろうか。我々はここでメンガーの『方法』を考察しなければならない。



（注1）Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. 2. Aufl. S. 1.
（注2）a.a.O., S. 1.
（注3）a.a.O., S. 2.
（注4）a.a.O., S. 3.
（注5）『経済学説全集』第9巻『近代経済学の生成』一一九頁。
（注6）Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. 1871. S. 32. 安井琢磨訳『国民経済学原理』三〇頁。
（注7）Grundsätze. 2. Aufl. S. 4.
（注8）Grundsätze. 2. Aufl. S. 4.
（注9）メンガーは Bedürfnis を第二版では二つの意味に使用している。その一つは人間の意識とは無関係に、即ち人間によって認識されると否とに拘わらず、存在する人間の全体的発展の条件そのものを客観的に指している場合である。第二は人間によって認識された Bedürfnis である。「人間的 Bedürfnis は発見されるべきものである」という場合は前者であり、「真の Bedürfnis」「虚偽の Bedürfnis」というときは後者である。第二版において、メンガーは第一の意味での Bedürfnis をより多く使用している。財性質の前提の第一が初版では Ein menschliches Bedürfnis となっている（S. 3）のに対し第二版では die Erkenntnis, beziehungs-

weise die Voraussicht eines menschlichen Bedürfnisses と書きあらためられている（S. 11）のも、メンガーが意識して第一の意味で Bedürfnis を使用したことを示すものではないであろうか。ただ第二版でもこれらはしばしば混同されている。

（注10） Bedürfnis は通常「欲望」と訳されているがこれは誤解を生じやすい訳語である。ナイトは全く適切に "he [Menger] always spoke of "need" not of want, desire, or craving" と述べている。Carl Menger: Principles of Economics. 1950. Introduction by Frank H. Knight. p. 16.

（注11） Grundsätze. 2. Aufl. S. 6.

（注12） a. a. O., S. 6.

## II

メンガーによれば理論的研究は、これを二つに分類することができる。その一つは現実的、経験的方針（die realistisch-empirische Richtung）であり、他の一つは精密的方針（die exakte Richtung）である。前者は「現象の定型と定型的関係を、その『完全な経験的現実性』において、従ってその本質の全体性とあらゆる錯雑性とにおいてあらわれるがままに研究するということ、換言すれば現実的現象の全体を一定の現象形態に整頓し、その共存と継起における規則性を経験的な仕方で見出す[注1]」ものである。この方針によって到達しうる科学的認識は、現実定型および経験的法則であり、厳密な定型にも、厳密な定型的法則にも到達することはできない。現実的・経験的方針によって獲得される「『法則』は実際上ただ、現象形態A及びBに属する具体的現象には、現実においては、規則的に又は例外なしに、現象形態Cに属する現象が継起するか、又は後者が前者と共存すると観察されたということを意味しうるにすぎない。現象A及びBに一般に（従って観察されない場合をも含めてのあらゆる場合において！）現象Cが継起するとか、又はこれらの現象が一般に共存するという結論は、経験を超え、厳密な経験主義の観点を超える、即ちかような結論は右の観察方法の立場からは厳密に保証されていない[注2]」。これに反して精密的方針は「現象の厳密な法則を確立すること、即ち、単に例外のないものとして現われるばかりでなく、吾々の辿る認識通路の点からして正に例外のないことの保証を内包しているところの現象継起においての規則性、一般に『自然法則』とよばれているが、『精密的法則』とよんだ方が正しいであろうところの現象の法則、を確立することである[注3]。」精密的方針にとって最も基礎的な意義をもっている認識規則は、「ただ一回だけでも観察されたことは、厳密に同一の事実的条件のもとにおいてたえず繰返し現象としてあらわれねばならぬ[注4]」という命題である。「そこで精密的法則が一般に獲得可能なものであるとすれば、……理論的研究が上記の認識規則の諸前提に従うことによってのみ可能である、ということは明かである[注5]。」かくして精密的方針は「すべての現実的なもののもっとも簡単な要素を、即ち正にもっとも簡単であるがゆえに厳密に定型的に考えられねばならぬ要素を……ただ部分的にのみ経験的・現実主義的な分析によって……確立しようとする、……このような要素がその完全な純粋さにおいて独立に表示されうるか否かをさえも顧慮することなく、このような要素を確立しようとする[注6]。」このようにしてえられた要素から、かような要素のすべての他の影響からの（同様に非経験的な）隔離の下で、より錯綜した現象がどうして発展するかを、精密的な（同様に理念的な！）度合を絶えず顧慮しつつ、研究し[注7]、「我々の思惟法則そのものからして例外がないとしか考えられない現象の法則に、即ち現象の精密的法則、所謂『自然法則』に到達する[注8]。」かくしてえられた結果は経験をその試金石とするものではない。この法則は「ただ精密的研究に適合した観点の下にのみこれを観察するなら、真であり、絶対的に真である[注9]……。」

我々はこのような精密的法則による認識をさしあたり仮説的認識と考えることができよう。即ち精密的方針が仮定する条件は経験的現実におけるなんらの保証を要するものではなく、またこのような保証はなんの重要性も有しない。したがってその条件の下にえられる精密的法則もまた同様である。それは仮説の下において吾々の思惟法則そのものからして例外がないということを意味するにすぎない。かくして精密的方針によってえられる理論は「自己完結的な論理構造物であり[注10]」、単なる仮説的図式であるとみることができよう。

だがメンガーはこの精密的方針によって、単なる仮説的図式をうることを目的としたのであろうか。そうとは考えられない。メンガーは次のように書いている。「経験の与えるがままの自然の現象を……精密的な仕方で、即ちすべての自然的事象に於いての厳密な法則性の一つの例証として理解しようとするものは、このような理解を、決して単に化学、力学の法則の中にのみ又は物理学などの法則の中にのみ求めてはならないのであって、ただ精密科学の総体または少なくともその多数によって初めてかような理解を獲得しうるであろう。蓋しこのような仕方によってのみ彼は、個々の精密的科学の観点の下ではおそらく現象界の不規則性、厳密な法則の例外と思われるような現実的現象の諸様相や諸側面の精密的理解に到達するであろうから[注11]。」社会科学の場合も事情は同様である。「これらの〔精密的な〕社会理論のそれぞれは勿論人間活動の現象のある特別な側面（完全な経験的現実性を捨象して）を理解させるにすぎないが、しかもその全体は、このような研究方針に相応した諸理論が他日認識された暁には……完全な経験的現実性においての〔傍点筆者〕社会現象の、人間精神にとって到達可能な限りの最も深い理論的理解を開くであろう[注12]……。」「その暁には勿論我々が特に国民経済の現象とよぶところの現実的現象の中に、非経済的な諸作用を――純粋の経済学によってではなく、これらの影響の属している他の諸領域の社会科学によって――精密的な仕方で、即ち経済的現象の法則性の例外としてでなく、社会的法則の例証として――勿論国民経済の法則の例証としてではないにしても――理解することができるであ

ろう。」[注13] 我々はこれらの言葉からメンガーが精密的方針から、単なる仮説的図式以上のものを期待していたことをしることができる。メンガーは精密的科学の総体は経験の与えるままの自然の現象を、また完全な経験的現実性においての社会現象を理解せしめると考えている。これは逆にいえば彼が仮説的図式が総体として完成されたときには現実世界と全く一致すると考えていることを意味するのではないであろうか。もしこのような見解が許されるとするならば、メンガーは精密的方針による理論の展開そのものが完全に現実の世界に継起する事象と一致すると考えていたということができるであろう。即ち彼のいう、孤立した、もっとも簡単な、もっとも本源的な諸要因は、現実世界においてもまさに孤立した、もっとも簡単な、もっとも本源的な要因であり、思惟の法則はそのまま現実世界の因果関連をあらわすものである。

メンガーはもっとも簡単な要素がいかにして確立されるかということについては「理論的研究はただ部分的にのみ経験的・現実主義的な分析によってこのような要素が確立される」とのべているのみであって、この要素がいかなるものであるかということは説明されていない。だがメンガーは歴史学派の原子論に対する批難に答えて次のようにいっている。「国民そのものは決して大きな、欲求し、労働し、経済し、また競争する主体ではなく、従ってまた『国民経済』とよばれるところのものは本来の語義においての国民の経済ではない。『国民経済』は決して国民の中においての諸単一経済……に類した現象、即ち大きな単一経済ではないが、また国民の中においての諸単一経済に対立するもの又はそれと並んで存立するものでもない。そのもっとも一般的な現象形態においては『国民経済』は独特な、……諸単一経済の錯綜である。」[注14] 従って国民経済の現象は「国民の中においての無数の個別経済的努力のすべてのものの合成果であり従ってまた上述の擬制の観点の下においては理論的に理解されえない。『国民経済』の現象はむしろそれが実際には〔傍点筆者〕個別的経済的諸努力の合成果として現われると同様に、またかような観点の下に理論的に解釈されねばならぬ。」[注15] 我々はここにメンガーが「事実において単一経済の諸努力の合成果として国民経済が構成されるが故にその発生的要素としての単一経済へ還元せしめる」[注16] というメンガーの考えを読みとることができる。これはメンガーが、あの本源的要素が単に論理的な仮定として存在するのではなく、現実世界における本源的要素でもあると考えていることを明白に示しているのではなかろうか。

「思惟の法則」と現実世界との関連についてはどうか。メンガーは『原理』初版の始めに「あらゆる物は因果の法則に支配されている。この大原理には例外はなく、また経験の範囲内でこの原理の反対例を求めようとしても無益であろう。絶えざる人類の発展はこの原理を動揺せしめる傾向を有せざるのみか、寧ろ却ってこの原理を確証しその妥当領域の認識を益々拡大するという結果を招来し、かくしてこの原理の不抜にしていや増す承認は人類の進歩と不離なる関係に置かれているのである。」[注17] 更に我々は『原理』第二版に「一定の原因は常に同じ結果を生む」[注18] という言葉を見出すことができる。

かくして我々はメンガーが孤立的な、もっとも簡単な、もっとも本源的な諸要素から、論理的思惟によって理論を展開する精密的方法を主張する裏面には、現実的世界がこのような諸要素から因果的な法則によって成立しているという見解を彼が有していることをしることができる。メンガーの考える現実世界は一切が本源的諸要素から、因果的に生成する。そこには例外はなく不規則性もない。いわばそれは精密的世界である。それゆえにこそ精密的科学はそれが充分に展開されたときには、その総体が「経験の与えるがままの」世界を理解せしめるのである。

（注1）Carl. Menger: Untersuchungen über die Methode der Sozialwissenschaften und der Politischen Oekonomie insbesondere. Leipzig, 1883, S. 34. 福井・吉田訳『経済学の方法に関する研究』（岩波文庫）六一―六二頁。以下訳の頁はすべてこの訳による。
（注2）a. a. O., S. 35. 訳、六三頁。
（注3）a. a. O., S. 38. 訳、六六頁。
（注4）a. a. O., S. 40. 訳、六八頁。
（注5）a. a. O., S. 40. 訳、六九頁。
（注6）a. a. O., S. 41. 訳、六九―七〇頁。
（注7）a. a. O., SS. 41～42. 訳、七〇頁。
（注8）a. a. O., S. 42. 訳、七一頁。
（注9）a. a. O. S. 57. 訳、八七頁。
（注10）G. Ritzel: Schmoller versus Menger, Eine Analyse des Methodenstreits in Hinblick auf den Historismus in der Nationalökonomie, S. 111.
（注11）C. Menger: a. a. O., SS. 64～65. 訳、九五頁。
（注12）a. a. O., S. 44. 訳、七三頁。
（注13）a. a. O., S. 66. 訳、九七頁。
（注14）a. a. O., SS. 86～87. 訳、一一八―一一九頁。
（注15）a. a. O., S. 87. 訳、一一九頁。
（注16）林治一「カール・メンガー財性質条件の方法論的背景」『神戸経済大学創立五十周年記念論文集・経済学編』、二六頁。
（注17）C. Menger: Grundsätze. S. 1. 安井訳、一頁。
（注18）C. Menger: Grundsätze. 2. Aufl. S. 35.

## 三

メンガーの考えた精密的世界は二元的な世界であった。メンガーは「自然現象の精密的な理論的解釈の帰着しなければならぬところの最後の要素は『原子』と『力』である」[注1] という。このことはメンガーが物理学、化学を常に自然科学における精密的方法の代表としてのべていることを我々に理解させる。メンガーにとっては物理

学、化学は「原子」と「力」を根源的要素とする精密的自然科学であったのである。だがメンガーの「原子」と「力」を根源的要素とする自然の世界は単に無機物の世界に限定されるものではない。自然的有機体も同様に「原子」と「力」から因果的に生成するものである。自然的有機体はその精密的理解を拒否するものではない。「自然的有機体の精密的分析は決して完全には成功せず、現実主義的・経験的研究が少なくともある点において自然的有機体の理論的理解のために常になくてはならないものであり、またその物理学的・化学的（原子論的！）理解は右の理由だけからしても決して絶対的な支配を獲得するに到らないであろうということは可能である。……しかしながらこのことからして自然的有機体の精密的（原子論的）理解への努力は一般に正当でないと、否非科学的であるとさえ、結論しうるのは自然的有機体の領域においての理論的研究の現状について全く無知な者だけであろう。『生理学は生活過程の研究にあたっても諸自然力の無条件の法則性を考慮することを決意しなければならなかった。斯学は有機体の内部に進行するところの物理学的過程及び化学的過程を真剣に追求しなければならなかった』とヘルムホルツは言っている。」[注2] メンガーが有機体の精密的理解が決して完全には成功しないであろうとのべているのは、「有機体がそのすべてにおいては原子と力を本源的要素とする因果的過程のうちにあるのではない」ということをもちろん意味していない。これは「自然的有機体は……純粋に因果的な過程、諸自然力の機械的な作用の結果である」[注3] ということからも明らかである。したがってメンガーの考える自然は原子と力を根源的な要素とする機械的な因果の過程としてこれを理解することができよう。メンガーのこの自然観はまさに十九世紀自然科学と完全に合致するものである。即ち十九世紀にはドルトン（John Dalton 1766—1844）にみちびかれた近代原子論は不動の真理と考えられていたのであり、またビュヒナー（Ludwich Büchner, 1824—99）等の機械的生命観もかなりの力をえていた。

ところで社会についてはどうか。メンガーの本源的な要素はここでは「人間の諸努力、思惟し、感情し、行為する人間の諸努力」[注4] である。またその因果の過程についても彼は自然の場合ほど明確ではない。『原理』初版では「我々自身の人格及びその一切の状態も亦この大なる世界聯関の一環であり、従って一の状態からこれとは異なる他の状態への我々人間の移り行きは因果の法則に従うものとしてより外には考えることができない」[注5] とメンガーはのべている。ここには明らかに因果論的な社会観がある。だが『方法』第三編では「所謂社会的有機体は決して純粋に機械的な力作用の産物として把握され解釈されることができない」[注6] とあり、また「社会の発展の進むにつれて社会的諸関係への公的権力の目的意識的な社会的行為の結果である制度が現われる。『有機的』な仕方で成立した制度と並んで、目的意識的な社会的行為の結果である制度が現われる。『有機的』な仕方で成立した制度は社会的目的に向けられた公的権力の



目的意識的な活動によって発展させられ、更新される。今日の貨幣、市場制度、今日の法律、近代の国家などはすべて、個人的・目的論的な力と社会的・目的論的な力との、換言すれば『有機的』な要因と『積極的』な要因との結合した作用の結果として現われるところの制度である」[注7] とのべている。ここでは社会が因果論的な社会ではなく、むしろ目的論的な社会であるかのように思われる。だが必ずしもそうではない。個人的・目的論的な力からなる『有機的』社会については次のようにいうことができる。即ち個人的・目的論的な力そのものが単なる原因であると。個々人が目的論的な力をもつということは、酸素が水素と化合する力をもつということと本質的には変りがない。メンガーはこれを「これらすべての要因は窮極的には人間の慾望から独立している」[注8] と表現している。社会的・目的論的力の場合にはメンガーが因果論を放棄していることは明らかである。彼はこの場合には「実用主義的解釈——上記の社会現象の本質と起源を人間の社会的結合若しくはその主権者の意図や意見、支配可能な諸手段から説明すること——が実際の事情に適っている」[注9] という。これは社会現象の一部に目的論的過程を認めたことであり、『原理』初版からの後退である。しかし彼が貨幣制度について「法律的規定は明らかに一定商品の貨幣としての採用よりもむしろ既に貨幣となっている商品の貨幣としての承認を目的としたということを看過してはならない」[注10] といい、「国家とよばれるあの社会形象もまた、少なくともそのもっとも本源的な形態においては、個人的な利益のための諸努力の意図されない合成果だったのである」[注11] というのをみるとき、メンガーが社会の目的論的側面を極力排除しようとしていることを感ずる。しかも『方法』第一編においては明らかにこの目的論的世界の存在は無視しているのである。[注12]

要するにメンガーの世界は有機体をも含めて、「原子」と「力」を根源的要素とする因果論的な自然的世界と、「個人的努力」を根源的要素とする因果論的な社会との二つから成立しているのである。

このような二元的な因果論の世界を一元的な世界に統一することを試みたものこそ『原理』第二版の「Bedürfnis の理論」であったのである。

（注1）C. Menger: Untersuchungen über die Methode der Sozialwissenschaften. S. 157. 訳、八九頁。
（注2）a. a. O., S. 155～156. 訳、一八七—八頁。
（注3）a. a. O., S. 145. 訳、一七六—七頁。
（注4）a. a. O., S. 145. 訳、一七七頁。
（注5）Grundsätze. S. 1. 安井訳、一頁。
（注6）Untersuchungen. S. 175. 訳、一七七頁。
（注7）a. a. O., S. 181. 訳、二一六頁。
（注8）a. a. O., S. 45. 訳、七四頁。
（注9）a. a. O., S. 162. 訳、一九五頁。
（注10）a. a. O., S. 174. 訳、二〇八頁。

（注11） a. a. O., S. 180. 訳、二一五頁。

（注12） さきにみたようにメンガーは『方法』第一編では精密的方法の総体が経験されるままの社会現象を理解せしめるといっている。そこでは「実用主義的解釈」が必要であることには全くふれられていない。

## 四

メンガーの「Bedürfnis の理論」は始めにのべた通り Bedürfnis を人間の本性そのものから生ずる現象であると説明している。それは人間以外の有機体のもつ Bedürfnis と本質的に異ならない。それはいかに高度の意識現象であろうとも窮極的には有機体の本性である新陳代謝の随伴現象である。

我々はここでメンガーが経済の根源的要素である Bedürfnis を、有機体に必然的に存在する新陳代謝の随伴現象にまで還元したことに注意しなければならない。このことはなにを意味するか。我々は第三節でメンガーが自然的有機体を含む自然の世界を「原子」と「力」を根源的要因とする因果論的世界であると考えていたことを示した。だが同時にメンガーは社会は「個々人の力」を根源的要素とする他の因果的世界であると考えていた。この二つの世界のつながりはどこにもみられなかった。だが今や「個々人の力」は自然的過程に還元されることになった。経済の根源的要素である Bedürfnis は窮極的には自然的な過程の産物であることになった。他の一切の意識現象も、それがどのように高度のものであるとしても他の有機体のもつ種々の現象の高度化されたものにすぎない。

メンガーはこのように個人の力を単なる自然現象に還元し、かくて社会的な現象も一つの自然現象として、一つの大なる因果的な世界連関の中におかれることになった。そして一元的な因果の世界、「原子」と「力」とを根源的要素とする一元的な世界が誕生する。

ここで初めて我々は最初の疑問である「Bedürfnis の理論は自然科学、特に生物学から精神科学一般、特に経済学に導く橋である」というメンガーの言葉を充分に理解することができる。それはメンガーの二元的な世界を一元的な世界に統一するために、二つの世界にかけられた橋だったのである。我々はメンガーのこのような「原子」と「力」を根源的要素とし因果律があらゆるものを支配する世界をむしろ機械的唯物論の世界と共通のものを有する世界と考えてもよいであろう。[注1] そこでは原子と力は無機界を形成し、無機界は有機体の世界を形づくり、この世界は人間の社会を形成してゆく。そして人間のどんな高度な意識現象も「原子」と「力」から説明されることが不可能ではない。[注2]

このようにメンガーの世界を機械的唯物論的世界と考え、Bedürfnis の理論が自然的世界と人間の精神的世界を結ぶ環であると考えるとき、我々の問題であるメンガー経済学の二つの矛盾した性格、即ち目的論的性格と因果論的性格との矛盾はきわめて容易に理解される。[注3]



メンガーのいう「目的意識」は単に自然的な過程の結果として生まれたものであり、同時にそれは社会現象の原因として作用するのである。換言すれば「目的意識」は「力」と「原子」を根源的要素とする自然的因果論的過程が社会現象に到達するのに通過する中間項である。メンガーの経済学はこの中間項である人間の「目的意識」から、Bedürfnis から出発するがゆえに一見目的論的性格を有するかのようにみえるのである。

それでは wahr と eingebildet の区別、また経済と経済性の区別はどのように考えるべきであろうか。むしろ eingebildet なるものは Bedürfnis を根源的要素とする経済学が人間社会の一側面を理解せしめるものであることに原因する、例外なのではないであろうか。前にも引用したメンガーの文を再び引用しよう。「その暁〔精密的社会科学が総体として完成されたとき〕には勿論吾々が特に国民経済の現象とよぶところの現実的現象の中に、非経済的な諸影響や諸作用〔傍点筆者〕を――純粋の経済学によってではなく、これらの影響の属している他の諸領域の社会科学によって――精密的な仕方で、即ち経済的現象の法則性の例外としてでなく、社会的法則の例証として――勿論国民経済の法則の例証としてではないにしても――理解できるであろう。[注3]」ここで我々は非経済的なもの――すなわち――eingebildet な Bedürfnis や財、価値等々――が経済学の一面性からは理解しえないものとして考えられているのだということがわかる。

したがって「経済性」の概念は「根元的な価値原理をあらわさん」とするものではなく、むしろ Bedürfnis から出発するメンガーの経済学の一面性から理解しえない経済現象を排除した経済なのである。[注4]

要するに我々は次のように言いうるであろう。メンガーの経済学にみられる二つの性格即ち目的論的性格と因果論的性格は相互に対立するものではなく、因果論的な関連において目的意識が成立すると考えることで、目的論的性格を因果論的性格が内包しているのであると。そしてその調和の鍵が「Bedürfnis の理論」なのである。

（注1） 次の言葉を比較せよ。Ⓐ「原因はすべて一つの結果を生む。……宇宙そのものが、たえず互に交流する原因と結果との一大連鎖にすぎない。」(Paul Henri Thiry D' Holback: System de la Nature, 1770. p. 35. 高橋・三宅訳『自然の体系』上巻、九五頁)「一定の原因は常に同じ結果を生む。」(Menger: Grundsätze. 2 Aufl. S. 35.)「あらゆる物は因果の法則に支配されている。」(Menger: Grundsätze. S. 1. 訳、一頁。) Ⓑ「人間は、自然の作品であり、自然のうちに存在し、自然の法則にしたがうものであって、自然からのがれることはできない……。」(D' Holback: op. cit., p. 7. 訳、上巻、四五頁。)「自然的有機体は……純粋に因果的な過程、諸自然力の機械的な作用の結果

である。」(Menger: Untersuchungen. S. 145. 訳、一七六—七頁。) ここでメンガーは「自然的有機体」について、ドルバックは「人間」についてのべているのであるが、ただ両者が有機体を自然的過程のうちにみていることに注意していただきたい。ドルバックが人間についてこのように言う場合、もちろん他の有機体についてもこれを認めているのである。(c)「経験は人間に劣らぬ感受能力〔=霊魂=精神〕が動物にあることを証明している。」(Julien Offray de La Mettrie; Histoire naturelle de l'ame, 1745, *Oeuvres Philosophiques* de Mr. de La Mettrie. Nouvelle Edition, Corrigée & augmentée. Tome premier. A Berlin, 1774. p. 54. 青木・杉訳『ラ・メトリ著作集』上巻、八一頁。)「他の有機体と人間との間には……心理的関係においても……〔類似している〕。したがって動物の場合にはみられない意識現象も一層高度の発展または複雑さとして理解さるべきである……。」(Menger: Grundsätze. 2 Auflage. S. 36.)

ここにフランス機械的唯物論的世界観とメンガーの世界観との親近性をみることができるのであるが、これは直接的なものではないであろう。むしろ前にものべたように十九世紀の自然科学の多くに見られる原子論的、機械論的性格を通しての親近性と言う方が正しいかもしれない。

(注2) だが我々がメンガーの世界をこのように理解するときに一つの疑問がおこってくる。それは Bedürfnis がこのように自然過程の結果としてあらわれてくるものであるとすれば、なぜそれが経済の根源的要素となりうるか、換言すれば経済の根源的要素も自然世界と同様に「原子」と「力」ではないのかということ、あるいは精密的経済学は物理学、化学からの長くとても可能であるとは思われないようなプロセスを経なければならないではないかということである。

メンガーはおそらくこれを意識していなかったかもしれない。だが我々はこれを次のように理解することも可能である。即ちメンガーが Bedürfnis を外生的要因として考えていたとすることである。

メンガーは『方法』第一編、第四章で「人間経済の最も本源的な要因は、Bedürfnis, 人間に対し直接自然の提供する財貨(享楽手段ばかりでなく、生産手段をも含めての)、及び Bedürfnis の可能な限りの最も完全な満足の(財貨欲求のできうる限り完全な充足の)追求、である。これらすべての要因は窮極的には人間の恣意から独立しており、その時々の事情によって与えられている」(S. 45. 訳、七五頁) とのべている。我々はメンガーのこれらの経済の本源的要因を二つに分けて考えることができる。即ち一つは内的な要因(これは *Bedürfnis* とその可能な限りの充足の追求である)と他は外的な要因である自然の提供する財貨である。前者については問題はない。後者がここでの問題である。即ち後者は『方法』において自然的世界が「原子」と力から成りたつと考えられ、自然の精密的理解が「物理学」と「化学」からなされなければならない以上、当然根源的と考えられないはずのものであるが、彼はこれを人間経済の根源的要因としている点である。これは要するにメンガーが経済を扱う場合に自然の提供する財貨を外生的要因とみなし、根源的要因としたものであろう。したがって Bedürfnis が根源的であるとするのは Bedürfnis を外生的要因とみていたことを意味するとしてもよいのではないだろうか。

(注3) Untersuchungen, S. 66. 訳、九七頁。

(注4) もちろん「経済性」に結びつく現象を wahr とよぶ裏にメンガーが wahr なるものが望ましいものとして考えていたということは言えるであろう。この点について杉村・山田両教授の所説はこれを更に考えなければならないであろう。





## 経済学会報告会論題

〔昭和三十二年〕

九月十二日 オランダの経済計画について 大熊一郎
九月十九日 共同討論「日本経済の構造」
日本産業構造の問題点 鈴木諒一
日本経済の発展と外国貿易——交易条件と市場構造を中心として—— 白石孝
九月廿六日 所得税と消費税の効率効果 古田精司
十月三日 漁業経済学の問題点 高山隆三
十月十日 Responsibility Accounting の展開 高橋吉之助
十月十七日 近世初期の役家について 速水融
十月廿四日 Marx and Keynes R. Meek
十月卅一日 吾国の労働者の意識水準について 青沼吉松
十二月七日 成長経済学における利子率——ノイマンモデルについて—— 村井俊雄
十二月廿一日 農業恐慌と土地所有の危機——「十九世紀末農業恐慌」の性格について—— 常盤政治
十二月廿八日 原価計算制度の成立過程 坂本藤良
十二月五日 資金計画と利益計画 和田木松太郎
十二月十二日 国際財政学会帰朝報告 高木寿一
十二月十九日 経営政策と政府活動 関口操

〔昭和三十三年〕

一月十六日 現代経営学の基礎理論 野口祐
一月廿三日 共同討論「生産性と賃金」
生産性の測定について 高橋吉之助
生産性と賃金 辻村江太郎
一月卅日 一八八〇年代に於る労働組合運動と社会主義——イギリス労働党の起源—— 飯田鼎